10　次の文章は、妻となるべき女性を探し求める主人公三位の中将が、さまざまな女性と会う次第を記した物語『窓の』（室町時代成立）の一節である。読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　〈新潟大〉二〇二三年度出題

　神無月のころ、Ａ降りみ降らずみ、さだめなきころは、なほつれづれもひとしほやるかたなく心すごきをりしも、小侍従の君とて御のの娘来たりて、「右大将どのの姫君、御年はばかりにて御心深く、よろづなにごともなにごとも思し知りぬ。御かたち並ぶも侍らぬ」など、物語するを中将聞き給ひて、ゆかしく思し召し、小侍従の君をせちにせめさせ給へば、「『女御に』と父Ｂかしづき給ふなるが、母君あまたの中にまじらひ給はんことを、心もとなく思し召して、Ｃ心ゆかせたまはず。その外いまださだまり給ふこともおはせず」と申せば、いろいろにそそのかして、小侍従仲立ちして夕月夜のほどに入れ奉りぬ。

　姫君を御覧ずれば、まことにいまだきびはにたよたよとして、Ｄの初風にもなびきぬべき柳のにぞ見え給ひけるほど、御心ざしたぐひなく、行く末永く変はるべき世の習ひまでもおくれじ、とり給ふほどに、長き夜ながら明けやすく、御門に人多くて、立ち帰り給はんやうなくて①こもりおはしぬ。

　されば今日はの子の祝ひとて、などとりどり奉り給ふに、父大臣もふとわたり給ふに、中将几帳のかげに隠れ給へる後ろ影を御覧じて、また、、帯などの散り乱れたるを御覧じて、いかめしく腹だたしくののしり給ひて、「人もゆるさぬの君を、めづらかにはひわたる者やある。女御にと思ふものを、にまれが下のうちに、我をおしてさやうのことはせらるまじ」など、おどろおどろしく𠮟り給ひて、夜ごとに人をつけて②まぼらせらるれば、またとも、の葉のつてだに仲絶えて、夢にも通ふ道しなければ、あかぬ名残を互ひに忘れにて、Ｅ絶えはて給ふなり。　　　　　　　（『窓の教』による）

（注）

二八ばかり―「十六歳ほど」の意。

女御―の位の一つで、中宮より下。更衣より上。

行く末永く変はるべき世の習ひまでもおくれじ―「末永く来世まで共にと願う世のいにもひけをとるまい」ほどの意。

亥の子の祝ひ―十月の最初の亥の日に、餅を食べて子孫繁栄を祈る行事。

問１　二重傍線部①「こもりおはしぬ」・②「まぼらせらるれば」について、それぞれの動作主を〔　〕の中から選んで答えよ。

〔　三位の中将　・　右大将（父大臣）　・　母君　・　姫君　・　小侍従の君　〕

問２　傍線部Ａ「降りみ降らずみ、さだめなき」について、これが、読み人知らずの和歌「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」（『後撰和歌集』）に拠った表現であることを参考にしつつ、どの季節のどのような様子をあらわしたものか、簡潔に説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「かしづき給ふなるが」を、現代語訳せよ。

問４　傍線部Ｃ「心ゆかせたまはず」は、「お気が進まずにいらっしゃる」ほどの意であるが、これは、誰の心情か。また、どのような理由によるものか。「お気が進まずにいらっしゃる」につながって一文が完結するように、本文に即して四十字以内で述べよ。

問５　傍線部Ｄ「如月の初風にもなびきぬべき柳の風情」とあるが、これは誰の、どのような様子をたとえたものか。本文に即して三十字以内で述べよ。

◎問６　傍線部Ｅ「絶えはて給ふなり」とあるが、具体的にどうなったということか。そのようになった理由も含め、本文に即して八十字以内で述べよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝三位の中将

　　　②＝右大将（父大臣）

問２　Ａにわか雨が降ったり止んだりする不安定な天気に、Ｂ季節が秋から冬になったことを感じながらも、Ｃ気持ちが落ち着かない様子。

Ａ＝４〔「降ったり止んだりして不安定だ」という内容がなければ不可。〕

Ｂ＝４〔「季節が秋から冬になる」、「初冬である」という内容がなければ不可。〕

Ｃ＝２〔天気と気持ちが同調している内容があれば可。〕

問３　Ａ娘をＢ大切に育てなさっているＣそうだが

Ａ＝２〔「娘」は「姫君」でも可。〕

Ｂ＝４〔尊敬表現がなければ不可。〕

Ｃ＝４〔伝聞の意味がなければ不可。〕

問４　Ａ母君は、Ｂ姫君を入内させるとＣたくさんの女性にまぎれてしまうのではないかとＤ心配で（お気が進まずにいらっしゃる。）（38字）

Ａ＝２

Ｂ＝３〔「入内させる」は「女御にする」でも可。〕

Ｃ＝３〔同内容可。〕

Ｄ＝２

問５　Ａ姫君の、Ｂ二月の微風に揺れる柳のようにＣ弱々しくたおやかな様子。（30字）

ＡとＣがなければ全体０。

Ａ＝３

Ｂ＝３〔「二月の微風に揺れる」は同内容可。〕

Ｃ＝４〔「弱々しい・か弱い」といった内容がなければ不可。〕

問６　Ａ忍んで通っていたことを右大将に見つかり怒りを買い、Ｂ毎夜見張りをつけられ、Ｃ三位の中将は右大将の姫君のもとに手紙を送ることも通うこともなくなったということ。（76字）

Ａ＝３〔「右大将（父大臣）に見つかる」という内容がなければ不可。〕

Ｂ＝３〔同内容可。〕

Ｃ＝４〔「中将が姫君に手紙を送ることも通うこともできなくなった」という内容がなければ不可。〕

【現代語訳】

　陰暦十月の頃、降ったり降らなかったり、定めのない（初冬の時雨の）頃は、やはり手持ちぶさたもいっそうどうしようもなくもの寂しいちょうどその時、小侍従の君といって（三位の中将の）御乳母のおばの娘がやって来て、「右大将殿の姫君が、お年は十六歳ほどで思いやりが深く、あらゆることを何でも十分に理解してしまう。ご容貌は並ぶ方もございません」などと、話をするのを中将がお聞きになって、会いたいとお思いになり、小侍従の君をしきりにせき立てなさるので、「『女御に（したい）』と父大臣が問３娘を大切に育てなさっているそうだが、母君は大勢の中で宮仕えなさることを、不安にお思いになって、お気が進まずにいらっしゃる。それ以外はまだ決まりなさることもおありではない」と申し上げると、方々にせき立てて、小侍従が仲立ちして（月の入りが早い）夕月の頃の夜に（中将を姫君のところへ）入れ申し上げた。

　（中将が）姫君をご覧になると、本当にまだ幼くか弱くて、陰暦二月の春の初めに吹く風にもきっとなびくような柳の様子に見えなさったありさま（をご覧になって）、ご愛情は比類なく、末永く来世まで共にと願う世の慣いにもひけをとるまい、と固く約束しなさるうちに、長い夜だが早く夜明けとなって、ご門に人が多くて、（三位の中将は）引き返しなさる方法がなくて部屋の中に閉じ込もっていらっしゃった。

　そうすると今日は亥の子の祝いだと言って、餅などをさまざまに差し上げなさるところに、父大臣も不意に（姫君のお部屋に）お越しになると、中将が几帳の陰にお隠れになった後ろ姿を（大臣が）ご覧になって、また、懐紙や、帯などが散り乱れているのをご覧になって、激しくお怒りになり大声で非難しなさって、「誰人も（交際することを）許さないこの姫君を、目障りにもこっそり通う者がいる。女御に（しよう）と思うのに、誰であってもこの世の中で、私をさし置いてそのようなことは許されるはずがない」などと、恐ろしくお叱りになって、毎夜人をつけて見張りをさせなさるので、もう二度と、（逢うことはもちろん）手紙をやる手段さえ絶えて、夢でも通う道もないので、尽きない名残を互いに忘れないための形見として、（二人の逢瀬は）まったく絶えてしまったそうだ。